



絵引研究のインパクト

富澤 達三 (非文字資料研究センター 研究員)

1、『絵巻物による日本常民生活絵引』の発刊

洪沢敬三による絵引研究書『絵巻物による日本常民生活絵引』5巻本(+総索引)は、角川書店から出された『日本絵巻物全集』全25巻の付録本として世に出た。当初は薄い表紙で無線綴じの、「あくまで付録」という簡易な造りであったが、好評であったようで、第3巻目から独立して販売される⁽¹⁾。装丁の差は歴然で、販売本は丈夫なクロス綴じで厚紙の表紙・函入りであった(図1)。

1984年になり、平凡社から『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』(以下、『新版 常民生活絵引』)が、全5巻+総索引1巻で出版された。角川版と同じB5判クロス綴じで、別冊の総索引には、河岡武春氏と西和夫氏のエッセイ、網野善彦氏の論考⁽²⁾が掲載された。新版では、不鮮明な画像が入れ替えられ、明らかな誤記は改められている⁽³⁾。



図1 角川版『絵巻物にみる日本常民生活絵引』3巻の、付録本と販売本の比較

2、絵引のインパクト

絵画史料による歴史研究に、日本史でいち早く着目したのは中世史分野で、『新版 常民生活絵引』は、その動きに少なからぬ影響を与えた。なかでも黒田日出男氏は、荘園絵図・絵巻物・肖像画などの絵画史料の分析を行い、パノフスキーらの理論を取り入れて絵画を読み解き、次々と著作を発表していった。黒田氏は、「日本読書新聞」第2286号で『新版 常民生活絵引』に注目し、文化人類学者の小松和彦氏と、対談「中世民衆像の図像学—新版『絵巻物による日本常民生活絵引』(平凡社)の刊行を機に—」を行っている(図2)⁽⁴⁾。

この対談で黒田・小松の両氏は、①絵引の常民生活以外への拡大、それを実現する学際研究体制の構築/②文献

の補助としてではなく「絵そのもの」を読み解く研究の推進/③貴重な絵巻のカラー図版集の発刊と、研究者への情報提供の充実/④諸本がある絵画史料の比較研究の必要、などの意見を交換している。

ところで、日本国内における歴史学の毎年の研究動向を知るには、史学会による『史学雑誌』の特集、「回顧と展望」が大変便利である。

「回顧と展望」でも、『新版 常民生活絵引』に関する記述がある。1985年の「回顧と展望」を読むと、前年1984年の歴史学会全般は、アナル学派の影響下で、いわゆる「社会史」ブームが起こっていたことが知られる。同号の日本中世史分野の執筆担当者は石井進氏で、網野善彦氏の非農業民に関わる活発な研究の数々を評価している。さらに石井氏は、民俗学や歴史学との協業(=境界領域研究)で、中世民衆の心性が探られるなど、「社会史」的な意欲的研究が続出し、日本中世史が盛り上がった状況を指摘した。そのなかに『新版 常民生活絵引』に言及した、以下の一文がある。

文献史料が乏しいだけにこうした境界領域の研究には絵画史料が重要となるが、「絵引」として重宝されていた洪沢敬三『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻の、神奈川大学日本常民文化研究所による訂正を加えた新版(平凡社)の刊行は、まさに慶事である。(『史学雑誌』第94編第5号、65頁)

1980年代中期、絵引研究は再評価され、絵画史料を一次資料とする日本史の研究が、中世史分野から行われたのであった。



図2 対談「中世民衆像の図像学」(黒田日出男/小松和彦)

3、神奈川大学での絵引研究継承

かつて村田泥牛氏は、渋沢敬三の依頼で中世絵巻物に描かれた常民生活の場面をモノクロ画像で丹念に模写し、ときに一部を省略して「抜き描き」を行い、それらが検討され絵引研究として世に出された。現在では、オリジナルの図像資料をプロのカメラマンが撮影した、ブローニー判や4×5判の大型カラーポジフィルムからパソコンに読み込んで、超高精細のデジタルデータを作成し、検討用画像を作ることができる。例えば江戸幕府が編纂した巨大な国絵図、国宝級の貴重な絵巻や、屏風絵のように細かく描かれた作品であっても、デジタル画像なら細部まで拡大し、分析することができる。デジタル画像は複製も容易であり、技術的には絵引研究は進めやすくなった。

2003年に神奈川大学「人類文化研究のための非文字資料の体系化」が、文部科学省21世紀COEプログラムとして採択され、「非文字資料」研究のひとつの柱として、渋沢敬三の絵引研究を受け継ぐ試みが開始された。素材は18世紀以降の図像資料で、名所図会・農耕図・朝鮮中国の風俗画などで、絵引作業が行われた。第1期成果として、①東海道編(2007年)／②北海道編(2007年)／③北陸編(2008年)／④中国港南編(2008年)／⑤朝鮮風俗画編(2008年)が出され、研究機関に配布された。

第2期として『日本近世生活絵引 奄美・沖縄編』(2014年3月)、『18世紀ヨーロッパ生活絵引 都市の暮らしと市門、広場、街路、水辺、橋』(2015年3月)が出され、第3期も継続中である。渋沢らの絵引研究の素材が中世の著名な絵巻物であったが、有名・無名のさまざまな図像資料が選ばれている。歴史研究での「描かれた資料」の活用を進めるべく、バラエティーに富んだ図像資料が使用されるべきであろう。

おわりに

五来重氏は、角川書店の『日本絵巻物全集』の第10巻「一遍聖絵」の解説を書いたことが縁で、京都で角川源義社長と渋沢敬三に会うこととなった。このとき渋沢は五来氏に「絵巻物の各シーンに見られる民俗を字引(辞書)でなく「絵引」にしたい」と、絵引の構想を語ったという。これが角川版の『常民生活絵引』で、五来氏は同書に対して以下の感想を述べている⁽⁵⁾。

渋沢さんは率直に言って、衣食住・生産・交通交易に重点をおいて、年中行事や信仰・祭・仏事・通過儀礼・芸能などの精神生活の面には、あまり興味を示さなかったようであった。そうはいって

も「絵引」という発想はさすがで、絵巻物の効用は絵によって語られる具体性にある。

絵は、ことばによって説明されるが、文章を極力減らし、「絵そのもの」で中世の常民生活を具体的に見せた渋沢のオリジナリティーを、五来氏は評価している。

また、前出の黒田日出男氏も『新版 常民生活絵引』に関し、以下の指摘をしている⁽⁶⁾。

ただこの『絵引』は、絵に描かれている事物の名前を明らかにすることに力点が置かれたために、描かれている場面が何を表現しているのかについては言及がはなはだ少ないことなどの問題がある。だがそれは、絵画史資料に関心を持つ多様なジャンルの人々の共同作業によって、次の『絵引』が作られればよいのではないか。

近世日本社会は膨大な文字資料を残したが、専門の絵師や文人・絵心のある素人による肉筆画、複製された摺物・版本挿絵などの図像資料も膨大である。近世の図像で使われた絵画的技法は、対象を遠景からの視点で描いた景観や町並み中心の絵から、人物の顔が描き分けられ年齢・身分・職業までが明確に判別できる近景の作品まで、実に多様である。現在、神奈川大学非文字資料研究センターの絵引研究班では、渋沢が始めた絵引の手法で、近世の図像資料を分析している。事物や行為の名称確定から始め、描かれた景観・場の持つ意味・季節・年中行事や芸能 etc. を読み解くべく、異なる分野の研究者たちが知恵を出し合っている。

「絵引」というユニークな手法は、歴史・民俗学研究における図像資料活用の可能性を広げ、さらには図像資料自体が持つインパクトを知らしめる可能性を持つと考える。

〔謝辞〕本稿の作成にあたって、神奈川大学日本常民文化研究所の窪田涼子氏にお世話になりました。この場を借りてお礼を申し上げます。

〔注〕

- (1) 第1巻(1964)は『日本絵巻物全集』第9巻の付録、第2巻(1965)は第17巻の付録として世に出た。第3巻(1966)は第20巻の付録で、この号から独立した販売が始まり、巻末に『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻の広告も出されている。
- (2) 「童形・鹿杖・門前 ―再刊『絵引』によせて」のち、網野善彦『異形の王権』(平凡社、1993)に収録。この論考で網野氏は、角川版『絵巻物による日本常民生活絵引』発刊時、「学会誌の書評は現れなかったと記憶する」と述べている。
- (3) 山口徹「新版『絵巻物による日本常民生活絵引』の刊行にあたって」(『民具マンスリー』第17巻3号)
- (4) 1984年12月8日号6～7面。
- (5) 五来重『絵巻物と民俗』(角川書店、1981)、264頁。
- (6) 黒田日出男「黒山に籠はいた 開発史から絵画史料論まで」(黒田日出男先生退官記念誌刊行会、2004)、17頁。